

## ホセア書1-3章 「姦通する女への愛」

### 1A 結婚による預言 1

1B 時代背景 1

2B 三人の子 2-9

3B 変わる名前 10-2:1

### 2A 再び契りを結ぶ主 2

1B 全てを失う女 2-13

1C 恋人 2-7

2C 財産 8-13

2B 女をくどく主 14-23

1C アコル(災い)の谷 14-15

2C 三つの「その日」 16-23

### 3A 買い戻す預言者 3

1B 戻ってきた女 1-3

2B 帰ってくるイスラエル 4-5

## 本文

ホセア書1章を開いてください。ホセア書からマラキ書までが小預言書ですが、これは単純に預言の量が少ないことからそう分類しました。けれども中身においてその重要性が劣ることは決してありません。私たちがこれから学ぶ内容は、題を付けるなら「姦通する女への愛」です。神とイスラエルとの関係が、まさにそのようなものであったというのが、その内容です。預言者ホセアが、姦淫する女と結婚することを主に命じられて、彼女は夫の愛を受けながらも姦淫をし、娼婦また奴隷となっているところを、彼が買い取って再び自分のものとしします。それはまさに、イスラエルの民が背信の罪を犯し、それでも神が彼らを愛しておられて、引き戻そうとしておられる姿であります。そこに、私たちキリストにある者に対する神の愛をも見いだすことができます。

### 1A 結婚による預言 1

1B 時代背景 1

1:1 ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代、イスラエルの王、ヨアシユの子ヤロブアムの時代に、ベエリの子ホセアにあった主のことば。

ホセア書の時代背景が、王たちの時代から見て取ることができます。ユダの王が「ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ」です。これはちょうどイザヤが預言した時と同じです。イザヤがウジヤ王の死後に天の御座の幻を見て神によって遣わされ、アハズに預言しました。さらにヒゼキヤが王位

に着いていた時、アッシリヤ軍がエルサレムを包囲しました。それでヒゼキヤは衣を引き裂いて主の宮に行って祈り、またイザヤに祈ってほしいと要請しました。その時代です、ホセアは北イスラエルに対して預言していました。

北イスラエルについては「イスラエルの王、ヨアシュの子ヤロブアムの時代」とあります。彼は北イスラエルの初代王ヤロブアム一世ではなく、ヤロブアム二世のことです。このヤロブアムの後、アッシリヤ捕囚まで五人の王が立てられています。謀反によって殺されたりして数ヶ月の統治しか行っていない場合もあります。ヤロブアムの後にまたたくまに北イスラエルの政治状況が変わって、紀元前 722 年にアッシリヤによって北イスラエルのサマリヤが陥落しました。したがって、ホセアは「北イスラエルのエレミヤ」とも呼ばれています。エレミヤがユダの滅亡を預言したのと同じように、ホセアは北イスラエルが滅ぼされることを預言しました。

ホセア書に記されている北イスラエルの状況は主に二つありますが、一つはかつてアハブ王が妻イゼベルによって導入したバアル崇拝です。この偶像を慕っていることを神は姦淫の罪を犯している妻としました。エフーがバアル崇拝を根こそぎにしたはずなのですが、その後にも復活させたので、ホセア書にはバアルの名がたくさん出てきます。

そしてもう一つは物質的な繁栄です。ヤロブアム二世の時代、ソロモンの死後、国が二分された後、実はもっとも領土が拡大した時でした。午前礼拝も読みましたが、列王記第二 14 章を開いてください。25 節を読みます。「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。」レボ・ハマテとは、限りなくユーフラテス川上流地域にあるシリア北部の町です。ここまでのイスラエルのスパイ 12 人が偵察に行きました。神がイスラエルに約束された土地の北の国境線の町です。これはソロモン王国以降のことであり、ものすごい影響力を及ぼしていました。そして同じく列王記第二 14 章の 28 節を読むと、シリアの都ダマスコをもイスラエルのものとしていたのです。

けれども、この繁栄は不気味な滅亡の前兆とも言えます。ちょうど寿命に近づいた星のようです。太陽のような光を放つ、恒星と呼ばれる星は、その寿命になると非常に巨大化して何百倍、何千倍になるそうです。同じように、北イスラエルはアッシリヤによる滅亡の前に非常に巨大化したのです。そのように彼らがバアルを慕っているにも関わらず繁栄したことを、北イスラエルの人たちは、これを神の惜しみない愛の表れと見ることをせず、むしろバアルが私たちに繁栄を下さったのだと受け取ったのです。物質的な祝福の中で、ますます肉の欲望と偶像礼拝の中に溺れていったのです。この問題をホセア書は取り扱っています。

ところで、ホセア書は北イスラエルに対する預言であるにも関わらず、なぜユダの王をしっかりと

銘記しているのでしょうか？肝心の北イスラエルの王はヤロブアムだけです。これは、ユダにこそ神が定められたダビデの王座があり、そして神が定められたシオンの山と神殿があるからだと考えられます。イエス様もサマリヤの女に対して、「救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。(ヨハネ 4:22)」と言われました。シオンの山が正統なのです。北イスラエルは、純粋に政治的な思惑で初代王ヤロブアム一世が、ベテルとダンに金の子牛と祭壇を造り、そこで礼拝させました。そしてレビ人ではなく、勝手に祭司を立てました。ホセア書には、ユダだけでなくイスラエルもダビデを王として尋ねる日が来ると、預言されています(3:5)。

ところで「ホセア」という名前の意味は「救い」です。「ヨシュア」が「ヤハウェが救い」という意味を持っていますが、その「救い」の部分が「ホセア」になります。

## 2B 三人の子 2-9

1:2 主がホセアに語り始められたとき、主はホセアに仰せられた。「行って、姦淫の女をめとり、姦淫の子らを引き取れ。この国は主を見捨てて、はなはだしい淫行にふけているからだ。」

私たちはこれまで預言者たちが、単に言葉だけでなく行動をもって神の宣告を行なう姿を見てきました。裸になって歩いていたイザヤは、アッシリヤがエジプトを捕虜として連れて行くことを表し、横様になって寝ていたエゼキエルは、包囲されているエルサレムを表しました。ここでも同じように、ホセアが自分の行動をもって預言を行なうように命じられています。それが「姦淫の女」をめとることでした。これは衝撃的なことかもしれません。「信者と不信者に同じくびきを負わせてはならない」と言われた聖なる神が、なぜ神のしもべに姦淫の女をめとるように命じることができるのか、という驚きです。宗教改革者のカル빈は、これは寓話であり実際には起こらなかったと解釈しました。けれども、それは違います。イスラエルの国がご自分を捨てていることを姦淫の女として描くために、神はホセアに特別な使命を課しておられるのです。

ホセアは、単に主の命令を守るために彼女を娶ったわけではありません。娶るのですから、そこには愛情が生まれます。彼女を自分の妻として愛するという決断があります。そして彼女が自分から離れることによって、とてつもない苦しみと嫉み、痛みと悲しみを担います。これが、今、神が北イスラエルに対して抱いている辛い思いなのです。神のお心をホセアが実体験できるように、姦淫の女を娶りなさいと命じられています。

1:3 そこで彼は行って、ディブライムの娘ゴメルをめとった。彼女はみごもって、彼に男の子を産んだ。1:4 主は彼に仰せられた。「あなたはその子をイズレエルと名づけよ。しばらくして、わたしはイズレエルの血をエフーの家に報い、イスラエルの家の王国を取り除くからだ。1:5 その日、わたしは、イズレエルの谷でイスラエルの弓を折る。」

その女の名前は「ゴメル」です。「失敗して、断たれる」という意味と、「主によって、成し遂げられる」という二つの意味があります。とても興味深いですね。彼女は姦淫の罪を犯して、失敗して倒れます。しかし、主によってその贖いが成し遂げられます。私たちしても、主キリストがそのことを行なってくださいました。

ゴメルはこの男の子を含めて、合計三人の子を産みます。おそらくホセアとの間にできたのが、唯一、この男の子一人でしょう。「彼に男の子を産んだ」と、彼に対して出産したことが強調されていますが、他の二人はその言及がないからです。

その一人目の子の名は「イズレエル」です。イズレエルといえば町の名でもあり、また平原の名としても使われています。サマリヤとガリラヤの間を東西に走っているのがイズレエル平原です。ここには「イズレエルの谷」とあります。そしてそこに「イズレエル」という町がありますが、北イスラエルの王アハブが冬の宮殿を建てたところです。「イズレエル」という名前には、相反する二つの意味があります。一つは「散らす」で、もう一つは「集める」です。ここにも、ゴメルと同じように相反する意味があります。主はイスラエルの民を散らされます。けれども、終わりの日に彼らを再び集めてくださいます。

「イズレエルの血をエフーの家に報い」とあります。「エフー」のことを思い出せるでしょうか？列王記第二 9,10 章に彼が行なったことが書いてあります。彼は、かつてアハブとイゼベルが行なったことに対する神の裁きの器として用いられた人物です。アハブは、イズレエルの宮殿のそばにナボテという人が所有するぶどう畑を欲しがりました。けれどもナボテは断りました。するとイゼベルが、偽りの証人を立てて、ナボテが神と王をのろったと証言させ、そしてナボテを石打ちにして殺してしまいます。それでぶどう畑をアハブが手に入れたのですが、そこにエリヤがやってきて、この悪事に対する神の裁きを宣言します。アハブ家はどんな者もことごとく絶ち滅ぼされ、そしてイゼベルはイズレエルの領地で犬に食われる、という預言を行ないました。

エフーはアハブの子ヨラム王の側近であり、軍の司令官でした。エリシャの弟子の預言者が彼に油を注ぐと、周りの者たちが彼を王としました。そして、血相を変えて、ものすごい勢いで当時のイスラエルの王ヨラムのところに行きます。ヨラムはイズレエルの町にいました。そこでエフーはヨラムを殺します。また協力していたユダの王アハズヤも殺します。アハズヤはユダの王なのにアハブ家の婿になっていたからです。そしてエフーは、イズレエルにいたイゼベルが窓から見下ろしていたのを見て、横にいるイゼベルの側近に呼びかけて、彼女を突き落とせと促しました。彼女は窓から落ちて死にましたが、犬が彼女を食べて、頭蓋骨と両足と手首ししか残っていませんでした。

それからサマリヤにいる七十人のアハブの息子を、その世話をしている長老たちを脅して殺させました。首を二つに分けて積み重ね、門に置いておくと命じています。ユダの王アハズヤ家の者

たちも殺し、最後に、バアルの預言者をバアルの宮に集めさせました。「自分も大いにバアルを拝むつもりだ。」と言ってだましたのです。そして預言者たちがバアルにいけにえをささげる準備をしていたとき、一気に彼らをすべて殺し、宮を壊し、そこを公衆便所にしました。あまりにも激しく、残酷なことをエフーは行ないましたが、それでも主は「あなたはわたしの見る目にかなったことをよくやり遂げ(2列王 10:30)」たと評価しておられます。アハブ家を滅ぼすのは主の御心だったからです。

そしてエフーは王になります。けれども主はエフーに「四代目まで、あなたの子孫は王座に着く。」と言われました。時限つきです。理由は、エフー本人が、そしてその子、孫、曾孫もみな、金の子牛を拝むことをやめなかったからです。ヤロブアム一世がイスラエルに行なわせた偶像礼拝を捨てることはありませんでした。あれだけ熱心にバアルを滅ぼしたのですが、それが必ずしもすべての偶像を避けていたのではなかったのです。そしてヤロブアム二世はエフーの三代目の王であり、四代目のゼカリヤが謀反にあい、それでエフーの王座は取り除かれます。そしてイスラエルは罪を犯し続け、ついにアッシリヤによって滅ぼされてしまいます。

ですから、ここで主が男の子に「イズレエル」という名を与えられたのは、エフーを通しての神の裁きの器を思い起こさせるためです。エフーが神の裁きを実行するために多くの血を流したように、今度はアッシリヤがこのイズレエルにて多くのイスラエル人の血を流すことによって、神の裁きを実現させる、というものです。「イスラエルの弓を折る」というのは、イスラエルの軍事力をなくするという意味です。そして、イスラエル人はイズレエルの名のごとく、アッシリヤによって散らされていきます。

1:6 ゴメルはまたみごもって、女の子を産んだ。主は彼に仰せられた。「その子をロ・ルハマと名づけよ。わたしはもう二度とイスラエルの家を愛することはなく、決して彼らを赦さないからだ。」

二人目の子は女の子でした。ここに、ホセアに産んだという記述がないので、おそらくは他の男に産ませた子でありましょう。その名「ロ・ルハマ」ですが、「ロ」はヘブル語で否定を表す言葉です。「ルハマ」は「愛する」とか「憐れむ」という意味があります。だから「ロ・ルハマ」で、「愛さない」という意味です。神はここで「二度と」愛することなく、「決して」赦さないと強調されています。この箇所だけを讀むと、神は永遠にイスラエルを見捨てられたかのように読めます。けれどもすぐに、1章の最後と2章1節に、イスラエルを再び集めて、そして今度は「ロ・ルハマ」ではなく「ルハマ」という名に変えられているのを見ます。

ここで理解しなければいけないのは、主の愛、真実な愛というのは、罪に対しても愛しているということではないことです。主は罪を憎まれます。罪を許容することはできません。その思いが、「愛さない」「ロ・ルハマ」の言葉に表れているのです。しかし、罪を許容しないがゆえに、ご自身の中

で主は悶え苦しめます。その悶え苦しみが、預言者ホセアが姦淫する女であることが分かりつつ、めとっているところに表れています。

1:7 しかし、わたしはユダの家を愛し、彼らの神、主によって彼らを救う。しかし、わたしは弓、剣、戦い、および馬、騎兵によって彼らを救うのではない。」

北イスラエルが紀元前 722 年にアッシリヤによって滅ぼされる時、南ユダにはヒゼキヤがいました。そして先ほど話したように、アッシリヤ軍がエルサレムを包囲しました。ところが、一夜にして 18 万 5 千人のアッシリヤ軍を神は滅ぼされたのです。だからここで神は、弓、剣、馬などによって彼らを救うのではない、とされています。

1:8 ゴメルは、ロ・ルハマを乳離れさせてから、みごもって男の子を産んだ。1:9 主は仰せられた。「その子をロ・アミと名づけよ。あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないからだ。」

三人目は再び男の子です。名前は「ロ・アミ」です。「アミ」は「わたしの民」という意味なので、ロ・アミで「わたしの民ではない」という意味です。イスラエルの民が、もはや神の民としての立場を失ってしまうということです。これも、先の「愛さない」という感情と同じです。神の民が、神に背を向けているのであれば、神の民というのは意味をなさないので、主は聞き従うということをしておらず、肉体だけに割礼を受けている者は無割礼となるとパウロが言いました。「ローマ 2:25 もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。」

### 3B 変わる名前 10-2:1

1:10 イスラエル人の数は、海の砂のようになり、量ることも数えることもできなくなる。彼らは、「あなたがたはわたしの民ではない。」と言われた所で、「あなたがたは生ける神の子らだ。」と言われるようになる。

主がイスラエルを再び回復させます。「海の砂のようになる」というのは、主がアブラハムに与えられた約束です。そして、9 節にあった「わたしの民ではない」という状態は、「あなたがたは生ける神の子らだ」に変わっています。ここの「言われた所で」が大事です。自分が罪に陥ってしまったその場所で、神の豊かな祝福を経験できます。自分に罪が増し加わったところで、恵みがあふれます。ここに「恵み」の不思議があります。罪の中で死んでいる所で、主は私たちをご自分の子どもとすることができます。

ちなみにパウロは、ここの箇所を異邦人に適用させています。「ローマ 9:24-26 神は、このあわ

れみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。それは、ホセアの手紙でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」

1:11 ユダの人々とイスラエルの人々は、一つに集められ、彼らは、ひとりのかしらを立てて、国々から上って来る。イズレエルの日は大いなるものとなるからである。

イスラエルの人々だけでなく、ユダの人々も加わっています。エゼキエル書にも、エゼキエルが二つの杖を束ねなさいという神の命令を受けましたが、それはイスラエルとユダが一つになるためでした(37:15-23)。そして「ひとりのかしらを立て」とあります。これはダビデであると3章の最後にあり、メシヤご自身のことです。イエス・キリストが戻ってこられる時に実現します。それから「イズレエルが大いなるものとなる」という約束もあります。ここが流血の地ではなく、ぶどう酒と穀物の満ちるところになる、という約束です。そして「イズレエル」は「散らす」の意味ではなく、国々からイスラエルを「集める」という意味に変わります。

2:1 あなたがたの兄弟には、「わたしの民」と言い、あなたがたの姉妹には、「愛される者」と言え。

2章1節は、実際は1章の続きです。先ほどの男の子の名は「ロ・アミ」でしたが、終わりの日には兄弟たちを「アミ」と呼びなさいと命じておられます。そして女の子の名前は「ロ・ルハマ」でしたが、終わりの日には姉妹たちを「ルハマ」と呼びなさいと命じています。このように、主は決して愛することをやめません。罪を犯し、神に背を向けていたとしても、その罪を決して受け入れることはしませんが、それでも愛し続け、ご自身が痛みます。けれども、主はその者たちが立ち上がることを願っておられ、彼らが主を見捨てようと、主ご自身は彼らを見捨てないのです。

## **2A 再び契りを結ぶ主 2**

2章2節から、主に背を向けるイスラエルを嘆く言葉が始まります。

### **1B 全てを失う女 2-13**

#### **1C 恋人 2-7**

2:2 「あなたがたの母をとがめよ。とがめよ。彼女はわたしの妻ではなく、わたしは彼女の夫ではないからだ。彼女の顔から姦淫を取り除き、その乳房の間から姦通を取り除け。

「あなたがたの母」とは、イスラエルの国です。そしてまた、ゴメルのことです。ゴメルが、自分に対してしているのを考えながら、そしてイスラエルの国も同じことを主に対してしている、とうことです。イスラエルの国が、まことの神から離れてバアルを拝んでいることを神は嘆いておられます。

私たちは聖書の学びの中で数多く、神と人との関係を結婚になぞらえている部分を読みました。エレミヤ書においても、エゼキエル書においても、神がイスラエルを拾い上げて、彼女を王女のようにしたのに、それでも彼女は姦淫を犯して、そしてついに彼女自身が裸にされ、さらし者にされるという内容です。そして、教会もまたキリストと私たちが婚姻関係にあることを教えています。黙示録 19 章には、天に引き上げられた教会が小羊の婚宴の花嫁として登場します。この、結婚という堅い契約と誓約の中における愛です。親密でありながら、単なる恋愛と異なり、貞潔と忠誠に基づいているものです。そしてここに「顔から姦淫を取り除き、その乳房の間から姦通を取り除け」とあります。彼女が実に、自分ではない他の男と寝ていることを嘆いているのです。

2:3 そうでなければ、わたしは、彼女の着物をはいで裸にし、生まれた日のようにして彼女をさらし、彼女を荒野のようにし、砂漠のようにし、渇きで彼女を死なせよう。

エゼキエル書に、イスラエルの歴史を、野原に捨てられた女の赤子に例えている箇所があります。16 章ですが、「わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなた、『生きよ。』と言い、血に染まっているあなたに、繰り返して、『生きよ。』と言った。(6 節)」そして彼女を洗って、手塩をかけて育てて、大きくなり乳房が出てきたころになったとき、その裸を覆って、契りを結んだ、とあります。これは、イスラエルがエジプトから出て、シナイの荒野において神がイスラエルと契約を結ばれたことを表しています。今、ここホセア書では、イスラエルを再びこのような赤ん坊の状態にようにする、すなわち神がまだ介入される前の状態に戻すと宣言されているのです。つまり、アッシリヤによって捕らえ移され、奴隷状態となり、イスラエルの地は荒地になり、他の異邦の国々の民となんら変わることはない状態にする、ということです。

2:4 わたしは彼女の子らを愛さない。彼らは姦淫の子らであるから。

先ほどの、ロ・ルハマとロ・アミのことです。罪を持っているまま、霊的な姦淫を犯しているままの子らを、親しく愛することはできないということです。私たちはしばしば、そのままの貴方で愛されています、という言葉聞きます。しかし、そんなことはできない、できるわけないだろ！というのが、ここでの主

2:5 彼らの母は姦淫をし、彼らをはらんで恥をさらし、そして言った。『私は恋人たちのあとを追う。彼らは私にパンと水、羊毛と麻、油と飲み物を与えてくれる。』と。

この「恋人たち」とはバアル神のことです。思い出してください、ヤロブアム二世の時のイスラエルは繁栄していました。でもそれは、イスラエルの名を地から消し去りたくないという神の憐れみの現れであって、彼らの偶像礼拝を是認されているからではありません。けれども当の本人たち



は、これだけ自分たちが豊かになっているのはバアルのおかげだと思っているのです。バアルは「主人」という意味で、豊穰と深く関わっています。

2:6 それゆえ、わたしは、いばらで彼女の道に垣を立て、彼女が通り路を見いださないように、石垣を立てよう。

彼女が売春をするために、男の家に通います。あるいは売春宿に通います。神はその通り路を見出さないように石垣を立てると言われます。それは神がこの垣根を持っておられるからです。覚えていませんか、ヨブのことでサタンが神に対して、「あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。(1:10)」と言いました。もちろん物理的な垣ではなく、神が目に見えない守りの壁をサタンに対して作っておられたのです。このように、主は私たちを愛しているがゆえに、欲しがっているものが得られないという葛藤をお許しになります。

2:7 彼女は恋人たちのあとを追って行こう。しかし、彼らに追いつくことはない。彼らを捜し求めよう。しかし、見つけ出すことはない。彼女は言う。『私は行って、初めの夫に戻ろう。あの時は、今よりも私はしあわせだったから。』

すばらしいですね、これが神の意図です。彼女が誰も相手にされなくなったようにされて、それでご自分に戻ってくるようにさせています。それも強制的にではなく、自ら悟って戻ってくるようにされます。これはまさに「放蕩息子」の女版です。富んだ父を持つ息子が遠くの国に行き、放蕩のかぎりを尽くし、飢饉がおそって、豚の食べるいなご豆さえも食べたいと思うようになった。それで我に返ることができ、父のもとに戻る決心ができたのです(ルカ 15 章)。石垣を立て、恋人に追いつくようなことをさせないのは、彼らがただ初めの夫に戻ることを願われてのことでした。

### 2C 財産 8-13

2:8 彼女に穀物と新しいぶどう酒と油とを与えた者、また、バアルのために使った銀と金とを多く与えた者が、わたしであるのを、彼女は知らなかった。2:9 それゆえ、わたしは、その時になって、わたしの穀物を、その季節になって、わたしの新しいぶどう酒を取り戻し、また、彼女の裸をおおうためのわたしの羊毛と麻とをはぎ取ろう。

おそらくホセアは、姦淫の罪を犯しているゴメルのことをずっと見守っていました。もしかしたら相手の男に、「これを女に渡してくれ」と言って、食糧や生活必需品を与えていたかもしれません。それを受け取った女は、「私がこの男から得た報酬だ。」と喜んでいたらかもしれません。これが、イスラエルが「この豊かさはバアルによるものだ。」と言っている姿です。そして、あらゆる良いものについて神に栄光を帰さない人間の姿です。自分の能力や知恵によるものであるとか、他の人がやってくれたおかげだとか、すべてのものを支配し、すべてのものを与え、すべてのものの源であら

れる神を認めようとしないのです。何々をするためのこういった手段のために、人々は金を惜しみなく払います。

イスラエルでは穀物は主に春に収穫されます。春の祭りである、初穂の祭りや五旬節がそれぞれ大麦、小麦の収穫を捧げるものであったことを思い出してください。そしてぶどうは秋に収穫されます。アッシリヤは、その季節に合わせて他国を侵略したそうです。そうすれば、遠征にいった兵士たちにその地の食糧で食べさせることができるためです。北イスラエルを攻め取ったとき、おそらく春が過ぎて夏のころだったのでしょう。ぶどうの実も出始めたころ、そして春の収穫が終えて穀物が豊かなころ、そこを攻めて持って行きました。

2:10 今、わたしは彼女の恥を、恋人たちの目の前にあばく。だれも彼女をわたしの手から救い出せる者はない。

自分たちがアッシリヤに攻められて、バアルに祈り求めても、何の答えもありません。それが、ここにある「彼女の恥を、恋人たちの目の前にあばく」というものです。自分自身の努力や知恵で、どうにもなくなった、プライドが壊された状態です。

2:11 わたしは彼女のすべての喜び、祭り、新月の祭り、安息日、すべての例祭を、やめさせる。

北イスラエルが行っていたのは、混合宗教です。これまで私たちはエレミヤ書とエゼキエル書の中で、ユダの人々がエルサレムにおける神殿礼拝を行っていたながら、かつ偶像礼拝も行っていた姿を読みました。完全な二重生活であります。神殿礼拝を行っていたときは、形式化していましたが正統で、純粋なものでした。けれども北イスラエルが行なったのは、その儀式さえも異教と混ぜ合わせた混合宗教です。ここで「新月の祭り、安息日、すべての例祭」とあるのは、聖書に出てくるものですが偶像礼拝との混ぜ合わせた中で行なったものです。

2:12 それから、わたしは彼女が『これは私の恋人たちが払ってくれた報酬。』と言っていた彼女のぶどうの木と、いちじくの木とを荒れすたらせ、これを林にして、野の獣にこれを食べさせる。2:13 わたしは、彼女がバアルに香をたき、耳輪や飾りを身につけて、恋人たちを慕って行き、わたしを忘れてバアルに仕えた日々を報いる。..主の御告げ。..

バアルによって、そのぶどうの木といちじくの木があるのだとするものを、主は取り上げられます。ここの「報い」というのは、「わたしを忘れたのだから、わたしもあなたを忘れたかのようにみなす。」という意味です。私たちは全てを失わないと、それが当たり前ではなく神からの贈り物であることを忘れてしまいます。パウロは、近親相姦の罪を犯した者を「サタンに引き渡した(1コリント 5:5)」と言いました。教会の一員になれているから、空気のように慣れ親しんでいたものを、教会から引き

離すことによって失わせる、ということです。

## 2B 女をくどく主 14-23

### 1C アコル(災い)の谷 14-15

2:14 それゆえ、見よ、わたしは彼女をくどいて荒野に連れて行き、優しく彼女に語ろう。

ここに神の変わらない愛があります。まず「それゆえ」という接続詞です。「あなたは裸になって、恥をさらしている。見るに耐えない。けれども、わたしはあなたのところに戻ろう。」ではないのです。「あなたは裸になって、恥をさらしている。かわいそうだ。だから、わたしはまたあなたをくどいて自分のものにする。」と言われているのです。主は、その優しさ、慈愛をもって、イスラエルを悔い改めへと導かれようとしています。しかも、そこは「荒野」です。かつて主が、シナイの荒野でイスラエルに会って、ご自分の愛を示されたように、同じように示されたいと願っておられるのです。自分の中の偶像が取り除かれて、自分にはどうにもできなくなって、裸にされているような、プライドが壊されている時に、その時にこそ神の愛を知ることが出来ます。

男であれば、美しい女、妖しさを漂わせている女を自分のものとしたいけれども、汚くて、傷だらけの女をくどこうなど絶対に思いません。それは肉体の愛です。けれども、神は私たちを愛しておられます。恋い慕っておられます。それは、私たちが何か恋い慕うべきもの、魅力的なものを持っているからではありません。いや、忌み嫌うべきものをたくさん持っています。けれども神の愛は、その忌み嫌うべきものを見て、むしろ私たちを憐れまれます。むしろもっと愛したいと願われます。ちょうど、父の家に戻ってきた放蕩息子を、遠くに見つけて彼に接吻した父親に似ています。そして失われた者が見つかったということで、これまでになく喜びと祝福を注いだ父親に似ています。

2:15 わたしはその所を彼女のためにぶどう畑にし、アコルの谷を望みの門としよう。彼女が若かった日のように、彼女がエジプトの国から上って来たときのように、彼女はその所で答えよう。

エジプトでの奴隷生活のように、スタートの前にふりもどされたイスラエルですが、主がその荒野のような状態にいるあなたに答えようと約束してくださっています。

ここで「アコルの谷」が出てきます。これはエリコの町に隣するところにあります。ヨルダン溪谷からエルサレムに上る道として使われていました。ここは、あのアカンが石打ちの刑にあった所です。ヨシュア率いるイスラエルの民がエリコを攻め取りました。そこにあるものはみな聖絶されたものであると神が言われたのに、アカンは金の延べ棒や外套などを欲しくなり、取ってしまいました。そのため、アイの町の攻略にことごとく失敗しました。ヨシュアたちがアカンが罪を犯したことを知ると、彼を石で打ち殺し、持ち物を火で焼きました。そして石くれの山を積み上げたのですが、そこがアコルの谷と呼ばれます。「アコル」は「災い」という意味です。けれども、そのことによって今度

はアイに打ち勝つことができました。

ですから、アコルの谷は災いを想起させます。しかしそこに、「望みの門」としてくださる約束があります。主の慈しみは尽きることはありません。私たちがどんなに失敗してしまったとしても、それでも希望がそこにあるのだよ、ということを示しています。

### 2C 三つの「その日」 16-23

そして次から、「その日」という言い回しが出てきます。これはイザヤ書などにも出てきた、神が究極的にご自分の救いを完成してくださる、神が定められた日です。多くの場合、終わりの時に実現します。「その日」という言い回しは、三回出てきます。

2:16 その日、..主の御告げ。..あなたはわたしを『私の夫』と呼び、もう、わたしを『私のバアル』とは呼ばない。2:17 わたしはバアルたちの名を彼女の口から取り除く。その名はもう覚えられないことはない。

何か豊かな祝福が与えられると、これまでは「バアルが私にくださった。」と言っていました。けれども、まことの供給者であられる主の名を彼らが口にします。主への呼び名が「私の夫」です。私たちは、このようにして主イエス・キリストを恋慕しているのでしょうか？主が戻られる時に、「御霊も花嫁も言う。『来てください。』(黙示 22:17)」

2:18 その日、わたしは彼らのために、野の獣、空の鳥、地をはうものと契約を結び、弓と剣と戦いを地から絶やし、彼らを安らかに休ませる。

主は、ご自分の民を贖われることと、ご自分の被造物を贖われることを一セットにまとめて考えておられます。天地創造の時に、天地とそこにある生き物を造られ、それで人を造られて試合されたのですから、その逆を贖いの時に行われます。「ローマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」主は、動物界をも支配されている方です。彼らに害を与えない契約、むしろ彼らに従う契約を結び、平和が与えられます。イザヤは、狼と子羊がともに宿るといふ預言を行ないました(11:6)。そしてまた、国々が剣を取らず、鋤に変えるという預言もありました(2:4)。

2:19 わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。

2:20 わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。

この「契り」は結婚式のことです。イスラエルを再び妻として正式に迎えるということですから、それを正義と公義をもって、また恵みと憐れみをもって、そして真実をもって結びます。正義は、真っ直ぐ

なことです。公義は、地上における公正さであります。恵みは、真実な愛、契約に基づく愛です。憐れみは、熱い思い、愛しているという感情であります。そして真実、信頼に値するということです。そして「主を知ろう」というのは、単に知識のことではありません。結婚の完成、夫婦の完成です。夫婦であれば初夜を過ごすことです。主をそれだけ親密に、密接に知るということです。

2:21 その日、わたしは答える。・・主の御告げ。・・わたしは天に答え、天は地に答える。2:22 地は穀物と新しいぶどう酒と油とに答え、それらはイスラエルに答える。2:23 わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、『愛されない者』を愛し、『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う。彼は『あなたは私の神』と言おう。」

主は、彼らを回復させた後に、当初からあった豊かさ、すなわち穀物と新しいぶどう酒を与えます。天から雨を降らせます。そしてその雨によって地が豊かになります。そして再び、穀物と新しいぶどう酒に恵まれます。今のイスラエル平原はイスラエルの穀倉地帯です。広く穀物が栽培されていますが、今とは比較にならぬほど終わりの日にはこの平原を主は祝福されることでしょう。そして、「イスラエル」には「まき散らす」という意味がありますが、ここでは豊かさを広げるという意味で使っています。そして「ロ・ルハマ」を「ルハマ」にし、「ロ・アミ」を「アミ」としていただきます。

### **3A 買い戻す預言者 3**

#### **1B 戻ってきた女 1-3**

3:1 主は私に仰せられた。「再び行って、夫に愛されていながら姦通している女を愛せよ。ちょうど、ほかの神々に向かい、干しぶどうの菓子をお愛しているイスラエルの人々を主が愛しておられるように。」

主はここで、ホセアとゴメルに場面を戻されます。ホセアがゴメルにイスラエルを生んでから、彼女は姦淫の罪を犯していました。二人の子を産み、それから、ついに彼からも離れて行ったのでしよう。彼女を愛しなさい、という神の命令です。つまり、自分の妻として引き取り、また契りを結びなさいということです。そして、「干しぶどう菓子」というのは、天の女王であるアシェラへの供え物でありました(エレミヤ 7:18)。その偶像礼拝をしている時に、なおのこと主はイスラエルの民を愛しておられたのです。罪は愛せません、けれども、契約に基づく真実な愛で愛していたのです。これが苦しみですね、ホセアが姦淫するゴメルを愛していたようにです。

3:2 そこで、私は銀十五シケルと大麦一ホメル半で彼女を買い取った。

ゴメルは奴隷市場で売られていました。自分の妻ですが、代価を払わなければ自分のものになることはできません。それで価格交渉をしています。出エジプト記 21 章 32 節には、牛が奴隷を突いて殺したら、奴隷の主人に銀貨 30 シケルを支払わないといけないとあります。その半額です

から、相当な安値であります。そして貨幣だけでなく、物品での支払いもしています。これはもちろん罪に売られた私たちの姿です。もともと神のものですから、対価を支払うというのは的外れです。けれども私たちが愛してやまないゆえに、ご自分の子の血と命という大きな代価を支払って私たちを買い取ってくださったのです。

3:3 私は彼女に言った。「これから長く、私のところにとどまって、もう姦淫をしたり、ほかの男と通じたりしてはならない。私も、あなたにそうしよう。」

ちょうどこれは、イエス様が、姦淫の現場でユダヤ人に捕らえられた女に対して語られた言葉と同じです。「今からは決して罪を犯してはなりません。(ヨハネ 8:11)」と言われました。そして「長く、私のところにとどまって」と言いました。これはもちろん、何十年という残りの生涯ということです。つまり、神とイスラエルの回復した関係は長く続く、永遠に続くという意味です。

## 2B 帰ってくるイスラエル 4-5

3:4 それは、イスラエル人は長い間、王もなく、首長もなく、いけにえも、石の柱も、エポデも、テラフィムもなく過ごすからだ。3:5 その後、イスラエル人は帰って来て、彼らの神、主と、彼らの王ダビデを尋ね求め、終わりの日に、おののきながら主とその恵みに来よう。

イスラエルは事実、長い間、王もなく、首長もない状態で生きてきました。アッシリヤに捕らえ移されてから、イスラエルに王が与えられたことは一度もありません。そして、その捕らわれの場では、自分たちがカナン人の宗教を取り入れていた、そのけれども終わりの日に、主キリストが戻ってくださいます。その時に、主は世界にまだ離散している多くのユダヤ人を集めてくださいます。彼らは神、そしてダビデ、つまりダビデの子キリストを求めます。

そして「おののきながら主とその恵みに来よう」とあります。私たちはその恵みに驚いているでしょうか？ 恵みを知ることは、私たちには恐ろしいことでしょうか。自分の姿が分かったものだからこそ、その恵みはへりくだりを生み、真実に神を恐れることができるようになるのではないのでしょうか？ 午前礼拝で、引用した、ティモシー・ケラー著「偽りの神々」には、後ろの方にこう書いています。「この症状は、偶像があることを認め、悔い改めるだけでは十分な治療にはなりません。意思の力をおって、違う生き方をしようと努めることも、硬貨はありません。偶像化ら背を向けるには…イエスがあなたのためにしたことを感謝し、喜び、そこに憩うことを意味します。その結果として、喜びに満ちた礼拝、祈りの中に神の存在を実感するようになります。そうやってイエスを想像すると、今までよりもっと美しく、あなたが今まで持ってきた偶像よりもっと魅力ある存在になるはずですよ。それが偽りの神々を置き換えるという作業です。」(214-215 頁)いかがでしょうか？ 荒野で優しく誘う主の姿こそが、最も魅力的で、私たちが偶像を保っているのを忘れさせてくれます。悔い改めることが目的ではなく、神の愛と恵みを知るために悔い改めるのです。